

古書のたのしみ（令和二年九月）

土屋博

九月に入りて三度ほど東京古書會館の古書市に赴くことを得。一月二十四日以来久方振りのことなれば、血騒ぐ心地ぞする。コロナ対策のため入口にて住所、氏名、電話番号を記入し、検温、手の消毒のち、やうやく入場を許可せらる。展示物、客数とも以前の三分の二程度なれど、矢張り満喫せり。

收穫は以下の如し。

一「山陽言行録・象山言行録 合巻」松村操編

（思誠堂、明治十五年刊、五四頁）

古書價格三千圓也。やや貧弱なる體裁なれば、値段に割高感こそあれ、希少性紛れも無し。松村操は、漢文學者總覽によらば、越後の出身、號は春風、明治十七年没、享年四十二歳。中村敬宇（正直）の弟子。頼山陽について曰く、「日本政記は最も晩年の作なり。記事病中に成る。病既に革なり。曰く我が死方に逼れりと。猶ほ眼鏡を著け政記を手にし刪潤して止まず。忽ち左右を顧て曰く、我將に假寐せんとすと。乃ち眼鏡を脱せずして瞑す。」と。また、佐久間象山について曰く、「象山の號は象山松代竹山の麓に生る。其山の形象に似たり。因て以て號となすなり」と。

二「朗吟集」宮崎湖處子編

（内外出版協會、明治四十二年刊、二七八頁）

古書價格八百圓也。例言に曰く、「此の朗吟集は、漢詩、和歌中より風教風雅に資する歌曲を拔萃したるものにして、男女學生の諷誦に供する目的を以て編纂したるものに属す」と。上篇漢詩の部（四言詩、五言古詩、七言古詩、五言律、七言律、五言絶句、七言絶句）及び下篇和歌の部（長歌、短歌）より成る。四言詩の詩經には「兄弟牆に閱げども外其の務りを禦ぐ」もあり。

三「増訂 桂月書翰」大町芳衛著

(修學堂、明治四十四年第六版、正價金五拾五錢、一二三頁)

古書價格三千五百圓也。初版は明治四十三年。序に曰く、「明治四十年十二月より手紙を書くに草稿を作るやうにしたり。茲に過去一年半以來の手紙の残れるものを集めて世に公にす」と。中身をみるに、「桂月全集第十二卷詩歌俳句書翰雜篇」の書翰の部の前半部分に概ね収録せられ居る様子なれば、稀少價値はさほど無きこと判明すれど、桂月ファンにとりては必携の一冊と覺ゆ。たとへば、「いばらき新聞社に答ふ」より、「伊藤公は當代の英雄に候。大隈伯は豪傑に候。西園寺侯は宰相の器に候。板垣伯は志士に候。筆とる人の中にては三宅雪嶺が一種の大人物に候」は簡潔にして滋味深し。四「訓註。ポケット菜根譚」臨風笹川種郎校(誠文館出版部蔵、明治四十四年第五版、定價金五拾錢、二一七頁)古書價格二百圓也。天金。序に曰く、「菜根譚は明代清言の一にして洪自誠の隨筆なり。現代人の理想は進んで自ら取るにあり。されど洪自誠一流の觀察と批評とは退いて己を完うする所以の途を示す。・・・現代の社會に於いて退いて自らを清うすることを得ば、眞に處世の祕訣を理解したるものと言ふべし」と。

五「頼氏藏版 日本外史 大正改版」全六卷

(著者廣島縣士族頼久太郎、著者相續人京都府平民頼龍二、發行者田中太右衛門・柳原喜兵衛・中川清次郎、大正四年改版發行、五四頁十五〇頁十四〇頁十五〇頁十五二頁十七〇頁)

古書價格三千圓也。教科書の體裁をとり和裝。比較的厚紙の紙質にて、總計三一六頁に及ぶ。活字は改版なれば讀み易し。

六「美文韻文 夕紅葉」文學士久保天隨著

(求光閣、大正四年刊、定價金參拾五錢、一二五〇頁)

古書價格千圓也。久保天隨は美文家として知られ、のちに臺北帝大教授を務む。

序文には「文反古の藻しほ草、かき集めてからくも編み成し、この一卷を以て大方の鑑賞を冀ふは、我ながらあまりに厚顔なり。さばれ、雨の夜など燈下の伴侶ともなりなば、げに我が幸といふべし」とあり。「雨龍川源の一夜」なる隨筆には以下の記述あり。「寛政十一年のむかし、はじめて択捉島に航し露人の樹てたる十字架標をぬき棄て天長地久大日本國とするしたる丈長の標柱を押し立てし近藤守重は、流石に曠世の奇傑なるかな」と。

七「袖珍 唐詩選講義」大畑匡山著

（春江堂、大正八年七版、定價七十錢、五二四頁）

古書價格二百圓也。初版は明治四十四年。天金。自序によらば、唐詩選は元祿年中服部南郭の校刊して童蒙の課本となせしより盛んに流行し、家絃戸誦苟も漢詩を吟誦する者は必ず之を愛讀したる由。

八「譯評 十八史略 全」 島田俊雄譯評

（島田俊雄法律事務所、昭和十二年刊、定價貳圓、本文九四四頁）

古書價格六百圓也。函入。譯評者の島田俊雄（一八七七年生、一九四七年没）は舊制山口高校、東京帝大法科大學卒。犬養内閣の法制局長官、廣田内閣の農林大臣、小磯内閣の農商務大臣を歴任。緒言によらば、「十八史略を初めて讀みしは數へ年八つか九つ頃、二回目
は萩中學入試準備の爲漢學私塾の老先生より素讀のみ。その後中學、高等學校、大學のときは全然十八史略など思ひ出しもせず。然るにその後久保天隨の假名雜りに譯せる袖珍本を手に入れ、いつも持ち歩き、遂に綴目のボロボロになれり」と。また、結語に曰く、「一般大衆としてはこれ程便利なる重寶なる讀物無し。日本にて漢學入門者に初歩第一の讀本として十八史略を讀まする事としたるは何人か知らねども、今よりして之を評すれば非常なる卓見といふべし」と。たとへば、卷の三、東漢孝獻皇帝、諸葛孔明に關する箇所、以下の如し。「瑯^{やうりやう}の諸葛亮、襄陽の隆中に寓居し、毎に自ら管仲樂毅に比す」と。

九「幕末維新遺墨新講」

（雄山閣、昭和十五年刊、定價貳圓五拾錢、二九〇頁）

古書價格三百圓也。二度目の購入。前回は「書の友」増刊號として、今回は單行本。市場相場は三千圓程度。序に曰く、「皇國二千六百年の歴史上最も光彩ある幕末維新の時代を舞台として活躍したるあの偉大なる志士の大精神を、その人間性の表現としての書畫を通じて觸れ、それに依つて己れの魂を清め、己れの行動を嚴にし、以て鞠躬盡力、皇恩の萬分の一に報奉らんことを期したき存念なり」と。橋本左内（號は景岳、尊敬する岳飛に由來す。）は幼少時既に頼山陽の日本政記を書寫したる由なれば、筆跡に岳飛、山陽の影響あり。

（令和二年十月五日受附）